

座談会「中村哲先生のスピリットを継承する」記録

座談グループ：ガンベリ



進行役：堀 優子 九州大学附属図書館 e リソース課長

参加者：梶井孝文 ペシャワール会・PMS 支援室

小林 晃 医師・元現地ワーカー

谷津賢二 日本電波ニュース社 カメラマン

藤井登睦 福岡高校 2 年 ペシャワール班

轟木亮太 大分大学医学部 2 年・九州大学薬学部卒業生・中村哲先生の想いを繋ぐ会/哲縁会

吉松拓也 九州大学芸術工学部 2 年・哲縁会

オブザーバー：宮崎信義 久山療育園理事長・医師（重症心身障害医療）・中村医師の友人

座談会コーディネーター：當眞千賀子 九州大学人間環境学研究院教授（発達心理学）

記録：九州大学附属図書館

※ この記録に登場する参加者の所属等は、座談会が開催された 2022 年 3 月当時のものです。

堀　：このグループの世話役を務めます、堀です。皆様よろしく申し上げます。

早速、皆さんの自己紹介をしていききたいと思います。若い人から順にしていきますかね、いきなり高校生は少し話しにくいかなと思うので、大学生のお二方からお願いします。

《自己紹介》

吉松　：では、自分から話していきます。九州大学芸術工学部の吉松拓也です。

哲先生と出会ったのは、高校1、2年生の頃に母の影響で哲先生のドキュメンタリー映像を見たことがきっかけです。映像の中で、乾燥した大地が緑豊かな土地に変わっていくことが本当に衝撃的で、もっとこの方について知りたいと興味を持ちました。

その後、大学に入学しまして、去年、大学の授業の中村哲記念講座に受講生として参加しました。そのつながりで、今は哲縁会という学生組織に所属しています。本日はよろしく申し上げます。

轟木　：大分大学医学部2年の轟木亮太です。私は元々九大の薬学部を卒業したという経緯もあり、去年の谷津さんや村上会長、藤田さんにも登壇していただいた「中村哲先生の想いを繋ぐ会」に企画などに関わらせていただきました。その後、記念講座のTAなどもさせていただきました。自分はネパールの農村に累計3か月滞在して、現地の人と共に被災した水道設備やコミュニティハウスを再建するプロジェクトをしました。その際に、中村哲先生の著書から考え方や現地の人々に関わる姿勢などを学ばせていただきました。

あとは、活動していた団体の先輩が、ペシャワール会の支援室で働かれていて、講演会があったり、蛇籠を作るワークショップとかがあったりとか、そういうときには呼んでいただいて、お手伝いさせていただけっていました。という感じです。よろしく申し上げます。

藤井　：福岡高校のペシャワール班に所属しています藤井と申します。

中村先生を知ったきっかけは、新聞でお亡くなりになられたというニュースを聞いて、中村先生のこと初めて興味を持ったのですが、この班に所属してから、知識を深めて、中村先生の活動や現地のことを知って、いろいろ興味を持ったので、本日は学ぶことのほうが多いですが、よろしく申し上げます。

小林　：私は1997年から4年間、現地で医師としてペシャワール会の活動に参加しました。学生時代にアジアの国々を放浪して、藤井さんもそうかな、いろいろ、海外医療やってみたいとか、そういうところに興味がありまして。国境なき医師団とかがテレビで活動しているのを見て、カッコいいことやってるなとか、そういう気持ちで、アジアの国々と関わっていきたくて思っています。

中村先生は、当時は全然というか、今ほど有名ではなかったんですが、パキスタンのペシャワールという所に、そういう日本人がおるよっていう噂を耳にしましたので、そのまま大学の卒業旅行で、ペシャワールに行つて。ちょうどそのときは、ソ連軍がアフガニスタンから撤退する頃で、世界中か



らジャーナリストがばーっと集まっている頃やったんですけど、そのときに中村先生に初めてお会いして、こんな人もおるんやなっていうことで、参加したいと思って、4年間、活動させていただきました。志半ばで途中で帰ったんですけども。

梶井 : おはようございます。ペシャワール会、PMS 支援室の梶井と申します。

PMS 支援室というのは、現地要員として、職員として雇っていただいて、治安が改善すれば現地で働くところになります。私はそこで5年間ぐらい働いてまして。きっかけは、前、現地で働いていたワーカーの人と縁があって、その人からお話を聞いて、自分も挑戦してみたいなというふうに思って参加しました。きょうは、よろしくお願ひします。

谷津 : 日本電波ニュースの谷津と申します。皆さん、初めまして。小林先生、梶井さんと、堀さんともよく存じ上げておりますが、どうぞよろしくお願ひします。

テレビのドキュメンタリーとか、記録映画を作る会社に在りまして。たまたま私は、幸運なことに中村先生に許されて、21年間ぐらい中村先生の取材をさせていただいていました。その間に、中村先生を撮った映像が1000時間ぐらいあるんですね。基本的に、今まで20本ぐらいドキュメンタリーを作っていますので、吉松さんが見ていただいたのは、多分私が作ったものかなと思っているのですが。

本来、記録する人間というのは黒子なので、皆さんの前でお話しするタイプではないのですが、中村先生のことをきちんと伝えていくためには、私が見て記録したことを伝えていくことが必要かなと思って、こういう活動にも参加させていただいています。

最初に取材したのが1998年で、そのとき小林先生がドクターとしていらしたので、小林先生と中村先生のやりとりとかも、いろいろ実は映像が残っているんですが、なかなかそういう出せていないものを、今後どんどん世の中に出さなきゃいけないなどは思っています。

どうぞよろしくお願ひいたします。

堀 : 私も一言。図書館で働いております、堀です。

中村先生が、前から福岡に在るっていうのもあって、中村先生のこと、テレビとか新聞とかでずっと見てきてはいたんですが、中村先生の亡くなられたニュースを、亡くなられた後、何か、私ができるとしたら何があるんだろうと考えたときに、アーカイブだなと思ったんですね。

中村先生の言葉とか、そういうものをきっちり残していけるのは、多分、母校である私たち、長く続く組織である私たちだろうと思って。できたらいいなと思っていたところ、当時の久保総長が、中村先生を記念する何かを作ろうという話になって、よし！と思って「こういうこと考えてるんですけど」って。村上会長以下、皆さんに、「それは是非！」と申ひいただいたので、それをきっかけに「(中村哲) 著述アーカイブ」を立ち上げさせていただきました。

そうすると、最初は、表に出てきているものを集めて…と思っていたんですが、話を聞いていくと、ものすごい記録魔で。お話ししたこととか、スケッチにしろ、何にしろ、ものすごくたくさんモノがあるんですね。それにかなり圧倒されながら、これをどういうふうにならばずっと続けていけたらいいかなというのは、日々考えているところです。よろしくお願ひします。



一同 : よろしくお願ひします。

堀 : じゃあ、若い方々から。長く中村先生を見てこられた方に「ぜひこれ聞いてみたいな」というようなことってありますか。

《中村先生を知り、想いを繋ぐ—若い世代は何ができる?》

轟木 : じゃ、自分が。今、(中村哲) 記念講座があつて、そこで受講していた学生とかが、学生団体として、中村先生のことを知つて想いを繋ぐ活動をしていこうって話になつてるんですけど、本を読むとか、中村先生のことを知るっていうだけだと、どういう活動をしたらいいのかなつて。読むだけではなく、やっぱり実践していくとか、何かをしていかないと、参考になるメッセージが生きてこないのかなと思つていまして。

かと言って、じゃあ今、アフガニスタンに行ける状況でもないしっていうところで。学生が何か具体的にイメージを持ったり、行動したりというのは、どういうふうにしていくのがいいのかな、もし、こういうことしたらいいんじゃないかっていうのがあれば、ぜひ伺いたいんですけど、どうですか?

堀 : 学生さんたちは、同じ世代に知つてほしいなつていうのが一番、ありますね。

轟木 : そうですね。二つあるかなと思うんです。

もちろん、同じ世代だったり、その後の世代にも伝えていくっていうのも、一つ、活動としてはできると思うんですけど。やっぱり、伝えるってなると、著書を読んだ方が、僕はダイレクトに言葉が伝わってくると思うので、一番いいと思う。

じゃ、僕らが代読して伝えるっていうのも、またなんか違うのかなと思つていて。そうなると、何をしたらいいのかなつていうところもあります。

小林 : 一つ意見ですけど。中村先生の本って、僕はあんまり国語できるほうでなかったから、(先生の本を) 読んでも難しいんですよ。20歳ぐらいだったらね。

恥ずかしい話やけど、僕は中村先生亡くなってから真剣に読んだの、声に出してね。そしたら、この年になったら分かることがいっぱいあつて。はっきりと言つて、うちの息子、娘も、ペシャワールに行つてるんです。行つてるけど、読まないんです。ぱっぱつていう感じで。先生の話が、あちこち飛ぶからね。で、ものすごく哲学的なこと書いてるから。若い子はどこまで分かつてるのかなつて。それは、文学部とか、中村先生みたいに、昔からそういうのに接してる人なんかには分かる、みたいなね。どうなんでしょうかね、あの本読んで。

『ダラエ・ヌールへの道』なんか、なかなかものすごく難しいと思うんですが。

轟木 : 確かにそうですね。いろんな本を読んでいくと、バックグラウンドとかが理解できて、解釈で



きるようになっていくのかなとは思いますが。

小林 : だから、そういう意味では、研究会なんかを見聞きして、みんなで語り合うとか。

轟木 : 本を1冊、みんなで一緒に読んでいくみたいな。

小林 : そう。で、ここ分らんかったとか、そういうような勉強会やってもええんちゃうかなと、私は思ったりはしますけどね。

轟木 : はい、ありがとうございます。

谷津 : すみません、僕もついでに話しますが。

まず、すごく大真面目にいうと、中村先生の本質って、こないだまた新しい「医師 中村哲の仕事・働くということ」という映像記録を作ったんですね。確か2011年7月、ペシャワール会報108号に書かれているのは、要は「人は人のために働いて支え合い、人のために死ぬ」とおっしゃっているんですね。（*注11）これは、大げさにいうと利他、オルトリズムって言って、エゴイズムの反対ですよ。他者のために生きるっていう考え方を、中村先生は実践されたんだと思うんですね。

このコロナ禍になると、多分、その考えなしには、われわれ、生き残れないだろうなっていうふうに、強く私自身が思っていて、自分ファーストとか、自民族ファーストとかでは生き残れない。だからこそ、他者のために働く、他者とどういう関係を結んでいくかっていうことが、ものすごく必要だとおっしゃっていたと思うんです。ただ、先生はああいう方なので、「大げさなことは考えなくてよか」みたいなことをおっしゃっていて、それは小林先生が書いている。まさに、一隅を照らして、置かれている場所で、何ができるかっていうことを考える。

ある講演会に、私がたまたま先生のかばん持ちで付いて行ったときに、大学生の方が「先生、何か、いい言葉をください」と言ったら、中村先生が「犬も歩けば棒に当たる」と言ったんですよ。みんな、どぎも抜かれて、どういうことなんだろう、みたいになったんですが、先生が「私、ふざけて言ってるわけではありません。若いときは、自分がこうならなきゃいけないとか、こういうふうに生きなきゃいけないなんて、考える必要はないんじゃないか」とおっしゃったんですね。「いろんなことをしてるうちに、だんだんいろんなものが見えてきます」と。

*注11：ペシャワール会報108（2011.7）

<http://hdl.handle.net/2324/4362965>

「吾々の良心的協力が、立場を超え、国境を超えて躍動しているのは、自然の理に適っているからだ。己が何のために生きているかと問うことは徒勞である。人は人のために働いて支え合い、人のために死ぬ。そこに生じる喜怒哀楽に翻弄されながらも、結局はそれ以上でもそれ以下でもない。だが自然の理に根差しているなら、人は空理を離れ、無限の豊かな世界を見出すことができる。そこで裏切られることはない。」



中村先生がおっしゃっていたのは「自分も医者になったときに、40年後50年後にパワーショベルに乗ってるとしてもいかなかった」と。だからそういう意味では、自分のできることをするっていうのが、先生のことを「先生ってこういう方だったんです」なんて、無理に伝えるっていうことは、僕は何となく必要がないような、気がしていて。自分が置かれた場所で、自分のできることをするっていうことが、多分、先生が目指していた、先生が望んでいたことなのかなと、思いましたね。

轟木 : ありがとうございます。

堀 : 今、PMS 支援室にいらして、伝える、伝えないとかではなく、きつともう、まさに実践というか、どうやってつなげていくか、その活動を続けていくかっていうところで、日々ご苦労なさっているとありますが、そういう立場から見ると、どうですか。実践を続けていくことで何か伝わっていくだろう、とか、そんなことを考える余裕とあってあるんですか。

羽井 : さっき轟木さんから、「実際、何ができるか」という話をいただいたんですが、この前、九大のかたも、中山さんの講演会をやったり、今日もペシャワール班が Zoom で会を開いてくださるじゃないですか。そういうことを定期的にしていってもらって、おふたりが辞められた後も、その次の人が続けてくれるようにしてもらおうのが、一番かなと思いました。もちろん、不安なところ、いっぱいあると思いますが。私たち支援室も藤田さんとか村上先生も、できる限りで力になりますので、そういう場をつくっていただくことが一番かなと。

逆に、自分も、九大のかたとか、ペシャワール班の人とか、学校と両立しながら、こういうふうに活動してくれてすごいな、と頭が上がらない思いです。

堀 : 講演会やイベントをしても、中村先生のスケールが大き過ぎて、ほんの少ししか、伝えられないんだろうけれども、そこをもらうことで、その人が主体的にいろんなものを見て、考えるというのが始まっていけば、それだけでもいいのかなという気がしていますね。そのために、アーカイブがどーんと、いつでも見れるような形に、できるだけ多くのものが提供できたらと思っています。

轟木 : ありがとうございます。

谷津 : 今、私も含めて、大人がきちんとして、世の中を残してない。中村先生が、現地でおっしゃっていたのは、「若い酒は若い皮袋に入れよう」(*注12)ということわざがヨーロッパにあって、要は、若い人たちは若い酒だと。自分たちの世代は、若い皮袋を用意してあげられなかった責任はあるっておっしゃってたんですね。

*注12: 『新約聖書』マタイによる福音書の一節「新しき葡萄酒を古き革袋に入るとは為じ。もし然せば袋張り裂け、酒ほとばしり出て袋もまた廃らん。新しき葡萄酒は新しき革袋に入れ、かくて両つながら保つなり」に由来する故事成語。新しい思想や内容を表現するには、古い形に囚われない新しい形式が必要という意で使われる。



だから、そのことは、われわれ大人が自覚しなきゃいけないなと思っていて。そういう意味では、今の自民党の政治家とか見てると、希望とか信頼とか、そういう言葉をおとしめて、足で踏みにじっているような大人が多いじゃないですか。その中で中村先生っていう信頼できる大人がいたんだっていうことを、皆さんが気付いてくださっていることが、素晴らしいなと思うんですよね。

中村先生が残したことが、希望とか信頼とかっていうことに、新しい命を吹き込んでるとしか、やっぱ、思えなくて。それを皆さん、関心を持ってくださっていることが、第一歩になっているんだろなという気はします。

堀　：いろんな世代の人たちが、こうやって一緒に話せる場っていうのは、すごく重要ですよ。ただ、今20歳前後の方が思っていること、それから30代ぐらいで行かれたんですか、ペンチャーワール？

小林　：31か2ぐらいですね。

堀　：谷津さんは、1998年って言われてましたが・・・。

谷津　：私は、先生に最初に取材したのは、多分、32、33ですよ。

堀　：どの世代で、そうやって関わりを持つかで、やっぱり、考え方とかも違ってくると思うんですよ。

谷津　：そうですね。小林先生みたいに、今まさに人の命と向き合っているかたもいらっしゃれば、私なんか完全に黒子なので、先生のことをどう伝えるかっていうこととは違うんですが。ただ、ベースにあるのは、先生が何を持っててっていうことと、自分がしてる行動を照らし合わせる土台になっている気はするんですね。

私や小林先生がすごく幸運だったのは、生身の中村先生と触れ合うことができたっていう。もう、それは今言っても詮無いことで、先生は戻ってこないの。

ただ、そのためにどうするかというと、やっぱり、堀さんたちがやってらっしゃるような、「中村先生が残したもの」っていうのがきちんとあって、そこから若い人も、どんどん自由に、いろんな先生の考え方を知って、それを自分の、今生きていることと照らし合わせるっていう作業が、もっと簡単っていうと語弊があるんですが、できるような場が、この会もその一つなんだと思うんですけども、きつこういう会が広まっていくっていうことも、さっきおっしゃった、どうしたらいいんでしょうかねってことにつながっていくと思うんですよね。

堀　：ありがとうございます。私、吉松君が、中村先生はデザイナーであると感じることが多々ありますって（インタビューシートに）書いてくださってるじゃないですか。その辺の話をちょっと聞きたいなと思って。



《デザイナー、中村哲先生の仕事》

吉松 : 私も、学部自体がデザインの学部で、プロダクトだったり、こういう空間だったり、デザインすることを学んでるんですけど、その中で、デザインって理論的に考える場と、直感的じゃないですけど、自分がやりたいことをやる場の二つあると思うんです。哲先生の場合は、本当、現地になじむって言い方なんですかね、自分が好きな考え方に、透明になって、他人の靴を履いたりして、現地で活動するっていう考え方があるんですけど、まさにそれを体現されてるような方だなと思ったりするなど。実際に理想なんかで終わらないで、実現するっていうことも含めて、そこがデザイン的な人なのかなと、勝手に思ったりはしてました。

堀 : どうですか。一緒に働いておられて。

小林 : 吉松さんが偉人として扱うのではなくと書いていますけれども、今から考えたら、中村先生は偉人やったと、それは当たり前の話なんです。僕はレオナルド・ダ・ヴィンチみたいな人やなと思ってですね。何でも、医療にしても一流にして。

谷津 : ダ・ヴィンチ的な天才ですよ。

小林 : 困ってる人がおれば、サンダルを分解して、それはどんなもんなのかっていうのを考えて、ハンセン病の患者さんのために靴も作ったし。ハンセン病の再建手術も、自分が知らなければ韓国に行って、それを学んだりして。それも一流の、最近でもやってるところですね。僕が直接関わったのは、PMS 病院を造るときですね。ちょうど 2000 年辺りね。あれも、中村先生が設計してるんですね。知らなかったのが、驚きましたけど。設計図まで書いてしまっ。

谷津 : バリアフリーにされてましたもんね、当時ね。

小林 : それも一生懸命考えて、換気はどうするかとか、女子トイレはどこにやるかとか、そのこと一生懸命考えて、そういうことまでやられとったっていうのは、今から考えれば、すごい人やな思っ

ていて。それも恥ずかしながら、中村先生が亡くなってから、こんだけ偉人やったっちゃうのを、改めて思った。

谷津 : 中村先生がおっしゃっていて、僕がよく覚えているのは、緑になったところと一緒に見ていたときに、「こんないい仕事はないです」っておっしゃったんですね。水路が延びれば延びるほど、人が喜んでくれて、みんなが笑顔になる、と。働くことの本質ってのは、やっぱり、誰かのために働くことだと、先生はおっしゃっていて。

先生が具体的に言ったのは、魚屋さんだったら、おいしい魚をお客さんに買ってもらって、ああ、おいしいって喜んでもらう。それ、誰かのためでしょう。床屋さんだったら、お客さんの髪をきれい



に切ってあげて、ああ、さっぱりしたって言ったら、それはお客さんのためだと。だから、仕事するのは、自分のためにするんじゃないと思うっておっしゃっていて。必ず誰かのためにすることが仕事だって、先生はたぶん強く思っていていらして。

吉松さんが言うデザインってことも、きっと、いいデザインをして、誰かがそれで何かが役に立つとか、新しいデザインの車いすがあって、それが非常に機能が優れているとあって、必ず誰かのためになることを、きっと吉松さんもこれからするんだと思うんですね。だから、長く先生取材していて、強く、それは、働くことの意味っていうのは、目の前で拝見すると、すごく考えさせられて。それはさっき一番最初に言った利他っていう、他者のために生きるっていうか、それは働くっていうことにも通じていて、これから学生の皆さん、社会に出たときに、自分のために働くってことじゃなくて、他者のためにどう関わられるのかってことが、きっと中村先生が望んだことのような気はします。

吉松 : 同感です。

《中村先生の言葉の脈、線引きをすることで見えなくなるもの》

堀 : 福高の藤井さん。中村先生の他に尊敬している方、仁徳天皇って書いておられるんですけど。歴史が好きとか？ どういうところに進みたい？

藤井 : 歴史が好きってわけじゃないんですけど、仁徳天皇って人は、自分の都の人たちが、飢饉とかで困っているときに、2年ほど徴税を停止して、どこまでが本当か分からないんですけど、都をよくするまで待っていた。自分の身を削ってみたいなことをしてたんですけど、尊敬してる人、そうですね。中村哲先生って、現地の人たちの話、自分の人生、現地にいて、相手のこと考えて、活動されている方なんで、通じるころはあったのかなと思うんですけど。どちらも尊敬する人です。

堀 : 「100の診療所より1本の用水路」と、福高の皆さんが（印象に残った言葉として）同じ言葉を書いておられるんですけど、これ、皆で勉強する中で、ここいいよね、みたいな感じだったんですか。

藤井 : まだ知識が浅いので、あんまり言えることは少ないんですけど、先生の活動ってやっぱり、現地の人、相手の立場になって考えるってことが、すごく大事なことなんだなって、彼の言葉とか活動を通して思いました。

堀 : このモスクとか、マドラサですかね。こういうのは、びっくりしてしまうんですけど。こういうところは、リアルタイムで谷津さんご覧になっていたんですね。

谷津 : 中村先生がモスク造っているときに、ずっとそばで撮影していたんですけども、そのときに中村先生にインタビューして「皆さん、喜ばれたでしょうね」みたいなことを聞いたら、「これで自由に



なった」っておっしゃったというんですね。そのときは、「自由になった」っていう意味が、なかなか分からないじゃないですか。「これで自由になった」って、意味が分からなかったんで、中村先生にその後よくよく聞くと、イスラム教徒とあるだけで、蛇蝎のごとく嫌われるとか、世界中がイスラムフォビアっていうんですが、イスラムに嫌悪を示すっていうのが、広まってしまったんですね、ヨーロッパとかで。

そういう中で、イスラム教徒であることが、あたかも悪いことであるかのような、ある種のプレッシャーっていうのをみんな感じている中で、中村先生はそういうところまできちんと見抜いて、モスクってのを建ててるんだと思って。要は、クリスチャンである中村先生が、モスクを造ってくださったっていうことに対する、彼らの感謝の言葉が「自由になった」って、そこはすごく深いんだと思うんですね。だから、中村先生の一つ一つの行動というのは、その場で拝見しても、小林先生と一緒に、後から考えて分かることが多いんですが、非常に重層的にものを考えていらした方なので、彼らが困ってるから建てましたではないんだと思うんですね。

ここに「100の診療所より1本の用水路」って藤井さんがおっしゃっていることも、きっと先生がどういうことを考えて、どういう思考の後にこういう発言をしたのかなっていうことを考えるっていうのが、きっと、そういうことをされたほうがいいかもしれないなみたいなことを思うことはありますね。小林先生もそうですけど、私も萩井さんも、その先生がその場でぱっと言ったことって、やっぱり、難しいことが多いので、どういうことなんだろうなと思うんだけど、後で分かったら、なるほどと腑に落ちることが多くて。それは先生が残してくださった本とか会報とかって、村上先生、金の鉦脈だとおっしゃったんですよ。

小林 : それ、誰がですか。金の鉦脈って言ったのは、誰が？

谷津 : 金の鉦脈って、村上先生がおっしゃったんですね。

小林 : 村上先生が。

谷津 : 掘れば掘るほど、いろんな。

小林 : ほんまにそうですね。

谷津 : そうなんですよ。中村先生の文章ってのは、本当にそういうものが多くて、金の鉦脈だなんて、つくづく。村上先生が言ったのは至言だなと思うんですが、自分が、今、向き合っていることが、どんなことなのかなと思って、先生の本とか会報を読むと、ある種の答えのようなものが、必ず見つかるんですね。

ただ、それで答え見つけて満足だっせずに、きっと若い世代のかたは、じゃあ自分がそれをするときにどう思うか、この先生の言葉から何を学ぶかっていうことがきっと。僕はもう、60歳なので、きっと皆さんのお父さんと同じぐらいなので、じじいのつもりで言ってますが、きっとそういうこと



が先生は望んでたんだろうなっていう。だから小林先生がずっと本、読んでらっしゃるっていうのは、私もつくづく分かって。

小林 : 私の場合は、4年間現地におったときは、ほんまに目の前にあることをこなすのに精いっぱい、言葉の問題とかね。子どもも連れてきたら、子どもの問題とか。それで4年間あっという間に過ぎてしまって。で、9.11のあれがあって。やっと現地で役に立てるかなと思ったときに、もういろいろ問題があって、志半ばで終わってしまったんですけどもね。

眞 : (座談の時間延長のアナウンス) Enjoy yourself、どうぞ楽しんでください。

小林 : そういうことで、志半ばで帰ってしまって。現地の人とペシャワール会の皆さんも一生懸命、家族4人を送るためには、大変なんです。そういうの、やっていただいたのに。別に期待されてたかどうかは、分からんけども、途中で辞めてしまったことに対して、非常にうつ状態っていうか、そういうのがあって。ちょっと自分を精神的に律せなあかん、と思って、座禅したりとか、お遍路に行ったりとか、いろいろしとったんです。で、いろんな哲学書をいっぱい読んだりするんだけど、全然頭に入ってこない。それで、ずっとそれなりに一生懸命人生を歩んで。

で、中村先生が亡くなって、中村先生の本を読んだら、ここに全部答えがあるやないか、と。答えではないけれど、谷津さんが書かれていますけれども、中村先生は、実践に基づいた哲学なんです。僕もそう思ったんです。中村先生は、現地を見なさいってことは、いつも言われとったですね。それに基づいて、金の鉱脈やないけど、素晴らしい言葉がいっぱい隠されてるんですね。そういうのがあって、ラッセルの哲学書で何が分かるんやって。分かる人には分かるかも分からへんけども。中村先生の言葉は、難しい言葉でも、実践に基づいてやってきた言葉やからね。谷津さんが言われてる「人と自然との和解」とかね、そういう素晴らしい言葉がいっぱいある。だから、そういうの研究したいって人がいっぱい出てくると思います。そういう意味で、学生さんたちも一生懸命、みんな読んでいただければと思います。

堀 : (オブザーバーの) 宮崎先生がこちらにいらっしゃってるので、ちょうどこういう若い頃から、中村先生と一緒に。変わってないんですか、その・・・。

宮崎 : そうですね、私が昭和41年、1966年、同期入学なんですけど、彼の素顔は常々のんびりしているんですよ。福高のときも、1年のんびり(浪人)してから入ってるんで、年は、彼のほうが一つ上なんですけど。よく言っていたのは「今の日本は何かせせこましい」ということです。YMCA活動や学生運動をはじめた後や、ペシャワールに派遣ワーカーとして活動し帰って来て会ったときも、「日本は息苦しい」と、高度経済成長のときですが、言っていました。

谷津さんがおっしゃった「自由になった」というのは、私なりに解釈すると、彼は嫌ってたのは、「金科玉条」とか「ドグマ」、「教条主義」をよほど嫌ってたのだと思います。嫌ってたというか、信用してなかった。だから、恐らく自分のやることが英雄視されることも、とても嫌ってた



から、最初から医療支援が成果を上げて、端緒は切っても現地の人に引き継げる素地を考え実践していました。

早い段階で始めてますもんね、ペシャワール・ミッション病院でも、それから医学の講義や、現地ワーカーの育成をしてますしね。ハンセン氏病のかたは、診療が進んでいくと軽くなる。そうすると、その人たちが自立できる生き方で、靴工場造って、日本からいろいろ、同じ靴を送ったり、材料送ったりしたんですけど。日本からすればわずかでも、労賃で自立できる。彼は洞察力が鋭いなんて言ったら嫌がるだろうけど、びっくりするような先見性と深みがあるんですよ。彼だから、腑に落ちる、ということ、たくさんありましたね。そして、後でお話しするけど、学生時代はあんまり目立たない、目立ちたがらないというかね。私なんかはよく、盛んなときで8カ月間、無期限ストライキした時代でしたからね。とにかくそのときに活動家が言うシュプレヒコールっていうのを嫌がってたんですよ。むしろ、黙々と淡々と、やるわけですね。そのことが、活動を始め、35年で凶弾に倒れるまで、淡々と、続けていったことが、よく分かると思いますね。取材なんかされても、そう思われたんじゃないですかね。

谷津 : 宮崎先生のおっしゃるとおりですね。自分のことを自慢話もしなければ、ひけらかすということも一切しない先生だったので。とにかく行動を見て、中村先生の息子さんが、いみじくも言ったように「俺は行動しか信じない」と先生はおっしゃったようで、あれこれ口で言う方ではなかったと思うんです。それは小林先生が身近で一番、よく分かってらっしゃると思うんですが。いい意味で中村先生の背中を見て、周りの人間が理解していくっていう。だからこそ、言葉も、民族も、宗教も違う人たちが、あれほど中村先生に付き従うっていうのは、べらべら言葉で「こうですよ君」ということじゃなく、行動をみんなが見るからこそ、先生についていったんだっていう感じは、取材させてもらって思っていました。

人の中の信義っていうのが、多分、関係ないんだと思いますね。宗教も、民族も、国籍も。だから、人として、何が大切なのかっていうことは、アフガンの人たちは鋭く見抜いていて、だからこそ中村哲のためなら命も捨てるっていうような、強い組織なんだと思うんですね。それがいいのか悪いのか別にして。とにかく、強い組織だだと思います、PMS っていうのは。

宮崎 : さっき、9.11の話をおっしゃったでしょ。あの後に急に、ブッシュなんかが、アフガニスタンにテロリストをかくまってるっていうのを、ずっと言ったときに、彼は、タリバンというのはいろんな人がおるよと。原理主義者だけじゃない、と。むしろ寺子屋みたいな学校で、現地の人を支える。だから施設造ったときも、イスラム教の寺院、モスクを建てたりして、全然信じられないかもしれないけど、それが彼にとっては当たり前ですよ。

眞 : ペシャワール会のタリバンの語り方っていうのは、世界的に見ても独特で。タリバンが、それこそ教条主義的に悪とか善とかっていうのではなくて、タリバンとひとくくりにして語るのが問題で。中もいろいろあって、実は、もっと中村先生の命を、ペシャワール会の行動を妨害する勢力から体を張って守ってくれたのも、タリバンの戦士たちだったっていうようなことなんかも、九大での講



演会するときにも、お話をしてくださって。

それこそアメリカのブッシュ大統領が「War for justice」みたいな、justice 対 evil みたいな、悪と善みたいにカパッと分けて語る語り方をするなかで、そうではない、よく見て判断しないとけない領域っていうのを提示してくださった。

今回、アフガンの混乱が起きて、当初の頃、全世界がタリバン批判みたいなことにば一っと走ったときに、中村先生やペシャワール会とゆかりのあった方や、メディアの方がたが、ちょっとブレーキをかけるような、タリバンを悪か善かっていう枠で決めつけることで、今後が良くなっていくわけではないという。その中にある良質な部分っていうのに対する着目も発言されてたっていうのは、すごく記憶に残ってる場所なんですけどね。

谷津 : 2001年に、一度だけタリバン支配下のアフガンで取材をしたことがあるんです、先生の手引きで。入ってみて、圧倒的に腑に落ちたのは、やっぱり、治安が良かったんですね。だから、百姓は農業ができて、商人は商売ができるっていうのを、タリバンが実現していたんですね。「宗教的に厳しい人たちだけでも」って先生は言ってたけど。あのときにアフガンの人たちが何を望んでいたかっていったら、40年も戦争してるので、誰でもいいから、とにかく治安を良くしてほしいっていうことに、タリバンがきちんと応えてたんですね。中村先生も「作業が今、一番、やりやすいですよ」っておっしゃって。それをアメリカとかが、一切無視して、壊してしまった罪ってのは、先生はやっぱり、憤っている。

今、眞先生がおっしゃってくださったように、中村先生って、物を見るときに、常にある意味、ニュートラル。小さい声しか上げられない人に耳を傾ける能力が、ものすごく高かったんだと思うんですね。小さな声しか上げられない人っていうのは、小さい声なのでなかなか人に届かないことに、すごく先生って、目も向けるし、耳を傾ける能力が、圧倒的に高い方だったんだっていう気はしましたね。

小林 : 今回タリバンが政権取って、僕がものすごい違和感を感じたのは、カブールの映像を流して、女性に対して差別をしてるってね。アナウンサーが「国際社会は、アフガンが前近代的な公開処刑や、女性平等をちゃんと守っていくか、見守っていかねばなりません」って、偉そうに言ってるけど、それやる前に、まず、謝らなあかんやろって。自分ら、自由と民主主義を掲げて、どんだけの人を殺してきたかって。そんなこと言わんと、国際社会がなんやかんや上から目線で見るとゆうのは、現地におった人にとっては、非常に違和感を感じたり。今もそういう報道は、時々なされてるからね。いまだ一般の方々は、何をしたかっていうことを、みんな理解してないとは思いますが。学生さん、皆さんはどんだけ理解してるか、あれなんですけど。

轟木 : 記念講座とかで、村上会長とか、藤田さんの話とかを伺ったりする中で、そういうことを繰り返しおっしゃっていたので、そうなんだっていうのは、中村先生に関連することで、こういう関心を向けてないと、やっぱりタリバンは悪いんじゃないか、とか、そういう認識は生まれてたのかなとは思いますが。



小林 : 一時、中村先生は講演会で、学生さんたちに言うことは、「大人たちの言うことを信じるな」って。それは、タリバンに関する報道とか、そんなんに関連してのことやったと思うんですけどね。

堀 : 8月の報道とか見ている、高校生の目から見て、中村先生のことを少し学んでいたところで、自分が違う目で見れたなとかいうような感じはありますか？

藤井 : そうですね。今まで僕は、ニュースとかそういうのを見て、そのまま信じるような人間だったんですよ。でも、現地の人とかは悪いわけじゃないのに、一部を見て全体を話して、治安が悪いよな、みたいなイメージを持って考えていたので、知識を深めたことで、一部を見て全体を判断するようなことは、意識してしないようにしないといけないなと思いました。

堀 : 若い人には、まずそこから、そういう目を持ってほしいなっていうのが、一番ありますね。

轟木 : 世の中の論調として、そうになってしまうって、なんでなんでしょうね。

谷津 : 自分が、メディアにいる人間なので、ある意味、天に唾するような感じもあるんですが、みんなが同じこと言ってるときに、疑ったほうがいいなっていうのは、多分あると思うんですね。今も、多分、ウクライナの報道も、ウクライナが善で、ロシアが悪かのように喧伝すると、勘違いしそうな。メディアの報道って、洪水のように流れてるので。ただ、プーチン政権が悪いだけであって、ロシア人が悪いわけじゃないじゃないですか。

だから、その辺みんなが、ウクライナが善みたいになっちゃったときは、おかしいなと思ったほうがいいのかもしれない。僕が言うのは、非常に心苦しいんですが。

宮崎 : 中村君が言ったのは、線引きをしないんだっていうことを言っていましたね。だから、悪の枢軸とか、ああいうのをものすごく嫌うんですよ。人間の多様性があってこそ、障害者のいない世界は健全なんだ、そんなことない。ノーマライゼーションの時代ができる話で、障害がある人、ない人、共に暮らしていける世間じゃないと。そういうふうには、はっきり言わなくても彼にはそれが身に付いてた、みたいな感じがしますね。

堀 : それは若い頃から、やっぱりそう、でしたか？

宮崎 : そうなんですよ。

いや、彼だったら、ちょっとくすぐったく思ってるようなね、人を愛すべく・・・信ずる・・・。

谷津 : 信ずるに足る、ですね。



宮崎 : こそばゆいんやないかな、それより、ぼつぼつと、当たり前のこととしてとかね。

小林 : ペシャワール会は、無思想、無節操、無駄、この三無主義やから、あんまり政治的な発言は、ペシャワール会としてはあまりしないわけなんですけども。
今、ウクライナの問題で、問題が出てきたら、ここぞとばかり、核共有って、核を共有するって。

谷津 : 核シェアリングね。安倍元総理が言い出したんですよ。

小林 : これは軍事費を上げなあかん、GDP2 パーセントとか言うて、叫んでる政治家おったけどね。
それは自分で考えることかも分からんけれども、しっかりそういう人たちにも、中村先生の本を読んでいただきたいなど、私の感想ですが。

《中村先生のことを伝える。実像はどんな人?》

谷津 : 若い方にちょっと聞いても。

堀 : もちろんです。

谷津 : 中村先生は、さっき宮崎先生がおっしゃったように、聖人君子に祭り上げられるのは、嫌だろうなって気がするんですね。ただ、どうしても報道とかだと、先生の人間的なことって、なかなか短い中だと出せないんで、自分自身もそれは、いろいろ反省したり試行錯誤はしてるんですが。僕らの世代だと、道徳っていう時間があってね、田中正造だとか、僕は正造が好きですけども、そういう人たちのことを勉強するのが、別にそのときには、一体、何だろうかなと思ってたんですが、中村先生と皆さんが捉えていくときに、道徳の授業じゃないみたいな感じで、皆さんがどういうふうに理解したいと思ってるのか、どういうことを見てみたい、聞いてみたいと思ってるのかっていうことを、聞いてみたいと思うんですけど。

轟木 : 一言で表せるわけじゃないですよ。すごく難しいかなと思うんですけど。今の質問としては、どういう質問でしたっけ、すみません。

谷津 : 要は、僕とか、小林先生とか、萩井さんとか、中村先生を直接知ってる人間は、先生が決して聖人君子じゃなくて、くだらない冗談も言うし、それが全てではないんですけど、とにかく真面目で、祭り上げられるようなことは、きっと嫌だろうと思うんですね。ただ、僕が作るドキュメンタリーだとかいろんなこととかで、そういう像をつくってしまってるのではないかなというような、ある種の心配は、実はあるんですね。

小林 : すみません、それに対して、ちょっとだけ、口、挟ませてください。



谷津 : どうぞ。

小林 : 僕はミーハー的な人間やから、中村先生が亡くなったときに村上会長に、「先生、中村先生は亡くなったからノーベル平和賞取れないですけども、ペシャワール会としては、ノーベル平和賞取れますから、それ取りましょう。取ってもっとみんなに知っていただき、お金を集めましょう」って興奮して言うたら、「迷惑です」って、「哲ちゃんは、そんなこと思ってません」と言って、叱られました。

谷津 : ちょっと質問が難しかったかと思うんですけど、私たち、小林先生もそう、靱井さんもそう、先生のことを伝えていく際に、先生の実像と離れてしまうってことは、すごく怖いし、中村先生ってのは巨人なので、表現すればするほど、実像ともしかしたらずれてるかもしれないっていう不安とか、隔靴搔痒感っていうのは、実はすごくあるんですね。

それを、中村先生はこういう人だったっていうことを伝えていくことの難しさっていうのもあるので、そういう意味では、皆さんはどういうことを知りたいなと思うのか。

ただ、すごいなと思うのは、そうは言っても、中村先生の言葉を聞きたい、文章を読みたいっていう人の熱っていうのは、燎原の火のようにずうっと広がってると思うんですね。それはやっぱり、中村先生のすごみで、皆さんもこういう場に参加してくださるっていうことそのものが、素晴らしいなと思ってるので、ちょっと僕の質問が変になっちゃいましたけども、皆さんが中村先生のことを伝えていくっていうのは、すごく大切だなって思いますね。

眞 : どんな人だと思ってる？って聞いてみるといいかもね。どんな人だと思ってます？

中村先生って。会ったことないだろうけど。

吉松 : 会ったことはないんですけど、知識だけやったら、偉人みたいな感じで、活動とかがすごく偉大な功績を残してるし。名言とか、すごくいい言葉とか残してくれてるから、やっぱり、偉人のように感じてしまうことは思ってますね、僕は。

眞 : 「こんなところ知りたい、実は」とかって、ありますか。だらしなないところか。おちゃめなところとか。

吉松 : 日常的にしていたこと、みたいな感じですかね、中村先生が。

谷津 : 小林先生もよく知ってると思いますが、中村先生って、緩急がすごくて、医師として、何か、ことに当たらなきゃいけない、今度は技師として、用水路を造るっていうときの顔付きとかと、そういうことから離れてリラックスしてる時は、ただの、本当にとぼけたおとつあんみたいな感じの落差がすごいんですね。多分、それも、ものすごい、魅力の一つで。この先生そのまんまだと、多分東京では必ず電車、乗り間違えると、講演会にたどり着けないとかって。それで僕がアテンドとか



頼まれるわけですよ。日本人であって、大人で、なんで僕が地下鉄で先生を案内するのかな、みたいなこともあるような。

當眞 : 一応、福岡って、都市部でいたはずだけど。

谷津 : それがやっぱり、ものすごい人間的な魅力で、ことが起きたときの先生の目の力とか、口が真一文字にこう結ばれて、ものすごい集中力でぐっと事に当たるときと、それからぱっと離れたときにすっとぼけた感じでの、その魅力の落差っていうのは、なかなか僕らは伝えきれてないなっていう気がするんですね。

堀 : 私は、講演会を初めて聞いたときに、中村先生、柳のような方だなって思ったんですね。すごい根は張っているんだけど、ふわっとかわすような、これまでやってきたことのすごさと、そのご本人が持っている、柳のような身のこなしというか、雰囲気っていうのが、すごくギャップがあるなと思って。でも、そういう柳みたいだったからこそ、こういう地で、こういうことができたんだろうなっていうのを、すごく感じましたね。

當眞 : 映像としては、私ね、モスクが建って、前でみんなでお祝いしてる映像で、大きな現地の人々が、まるで小学生みたいな中村先生をひゅっと抱え上げてやったときに、無邪気にきゃっと喜んでる感じ、あれはすごく、ほとんどもてあそばれてるような感じでしたけど、一緒に造ってきたところと、その遊ばれる感じっていうのが出てて、印象に残った映像でした。見たことある？

轟木 : はい、あります。すごい、想像つきます。今、ちょうど、その話されてるんだろうなって思いました。自分は講演会、何回か拝見したんですけど、いい意味で全然オーラがなかったというか。淡々と小さな口調で話されるなっていうのが、すごい印象的で。講演会が終わった後に、質問とかすると、冗談みたいな感じで答えられたりとか。その後、話す機会とかもつくっていただいたときも、すごい話し掛けやすいなっていうのは感じました。そういう、講演会とか映像資料じゃない部分を、もっと知れたらいいのかなとは、すごく思います。

小林 : 講演会後の質問ってありますね。あそこにも、金の鉞脈はいっぱい埋もれてると思うんで、あれをちょっと引き出して、誰かがやる作業はせなあかんと思うんです。

當眞 : そうですね。おっしゃるとおりですね。人柄がよく出てますよね。

小林 : 本音の部分が働いてるからね。

當眞 : そう。その柳のようなかわし方とかね。



轟木 : それこそ、『医者よ、信念はいらない』（*注13）見たら、本にすごく、学生向けに質疑応答の形式で書かれてて、それが一番、僕は中村先生のことに近づけたのかなという感じがしました。等身大というか。

谷津 : 中村先生、くだらない冗談とかも結構、言うんですよね、実はね。

全然ウケないんですよ。そうすると、小さい声で「がくっ」とか言ってるんですよ。娘の秋子さんが言ってたのは、家でもくだらないこと、言うんですって。そうすると奥さんも、娘2人も、全然面白くないから、またお父さんくだらないことを言っているとかって言うと、小さい声で「がくっ」ウケなかったみたいな、寂しそうにしてたっていう。ものすごく人間的な方なんですな。

小林 : 現地で大変な大事件が起こると、中村先生はいつもジョークを、おやじギャグを言ってね、ウケないんですけどもね。でも、（中村先生の口調をまねて）「こういうときはユーモアが大切です」って言ってね。「ユーモアはその場を和らげる」とかね。

谷津 : おっしゃってましたね。

小林 : 中村先生は、『夜と霧』（*注14）ですね。

谷津 : ヴィクトール・フランクルですね。

小林 : あの本をぜひとも読めと、僕に言ってくださった時期があったんですけど、そこに書いてあったんですね。そういうナチスの収容所、ああいう過酷な所で、みんなどうやって生きていったかっていうと、そういうユーモアを交ぜてそこを乗り切った。多分、そのことを先生、言っとったんだと。

谷津 : そうですね。先生は「捨て身の楽天性が必要だ」って言ってました。

「捨て身の楽天性」ってすごい言葉だなと。要は、非常に厳しい状況にあっても、悲観的になっちゃいけない。アフガン人っていうのは、パキスタン人もそうですけど、苦境に合っても、別にみんな、暗い顔をしてないんですよ。持たざる人の強さっていうか、持たざる民の強さっていうか、わしら何にも持ってないもんねっていう。もちろん、命に関わるようなことは手助けが必要なんですけど、彼らって非常にインディペンデントなんで、どんな苦境に合っても暗い顔してるわけじゃなくて、それをたぶん中村先生は「捨て身の楽天性」って言って、それが今の日本人には必要じゃないですかっておっしゃった。

*注13 医者よ、信念はいらないまず命を救え! : アフガニスタンで「井戸を掘る」医者中村哲 (2003.10, 羊土社)

*注14 『夜と霧 : ドイツ強制収容所の体験記録』ヴィクトール・E・フランクル著 (1946年出版)、霜山徳爾訳 1956年 (1947年版訳)、新版・池田香代子訳 2002年 (1977年版訳)、みすず書房。原題 “*Ein Psychologe erlebt das Konzentrationslager*” 「或る心理学者の強制収容所体験」 (霜山, 「『夜と霧』と私」, 『夜と霧』新版 (2002) : 159)



小林 : われわれには要求水準が高過ぎるって。

谷津 : そうそう。

轟木 : 自分がネパールに行って、土砂崩れで道が崩れて、これ復旧1カ月かかるわって言っても、みんな笑顔だったのが。まあ何とかなるよ、みたいになってというのが、すごい印象的でした。

谷津 : よく藤田さんが言っているように、先生ってすごい楽天家で、僕もそう思ったけど。

ものすごい工事が、もちろん先生、工事が大変なときは先生の顔付きが全然違うんですけど、それでも「何とかなるたい」って言って、楽天的なんです。それが、みんなが安心するんだと思うんですよね。リーダーが暗い顔して、こりゃいかんみたいになってたら、みんながついていけないと思うんですよね。

小林 : 「物忘れと勘違い」と、藤田さん書いてますけど、これよくあります。僕も結構、経験したこと。重要なこと、忘れてるんです。で、藤田さんが、「先生、また××でしょ!？」とか言って言ったら、「そんなことあったと? 忘れとった」とか言って。

谷津 : しょっちゅうですよ。

小林 : ほんまに忘れとったのか、その場を切り抜けるために忘れとったって言ってるか、よく分からないことがあったりして。そういうことも、先生、言うてますね。

谷津 : 一回、カマっていう所で、かなり田舎で撮影、いつも先生に乗せてもらってたんで、車が。

三脚付けて、たまには撮らないとやっぱり、畑のきれいな風景とか。「先生、ちょっと時間いただけますか」って言ったら、「よかですよ、どうぞ。車で、私、待ってますから」って言って。三脚付けて取ってたら、ぶーっと車が出発しちゃったんですよ。あれっと思ったんだけど、電話とかもないし。おかしいなと思って、その場で待つしかないんで、カメラなんか持ってるから、みんな、「なんだこいつ?」って感じにだんだんできてくるんですね。ちょっとまずいかなと思ったら、30分後ぐらいで、ぶーっなんて先生、戻って来て、「谷津さん、乗ってなかったんですか?」とか言うんです。中村先生に「先生、言ったじゃないですか」って、なかなか言えなくて、「すみません」って言うしかなくて。「なんで乗ってなかったんですか?」なんて言うんですよ、先生が。

その後、ドライバーさんが、わざわざ僕んところに来て、「ごめんね」とか言いに来て。中村先生、目つぶって、「ズー」というのが、「ゴー、行け」という意味なんですけど、「ズー、ジャララバード」って言ったら、ドライバーさんが「いや、先生、谷津さん撮ってますよ」って言っても、先生も眠いから「ズー、行け」って言うから、そのまま、谷津さんごめんって言いながら、出発したとか言って。先生が途中で後ろ見たら僕が乗ってないんで、「谷津さんどうした?」って。「あそこにあります」って言うから、戻れ戻れとかなったっていうぐらい。あそこまでできる人って、どこかやっぱ



り、少しなんか、ねじがあれかなって言ったら失礼なんだけど、常人じゃないところが、ちょっとあったですよ。

轟木 : 用水路とか、すごい計画的にされてるとは思うんですけど、計画性があったのか、計画性がなかったのか、どうなんですかね。

谷津 : それは、計画性は、すごいありました。あの用水路って、あんまりきちんと皆さんに伝えきれてないんですけども、平均傾斜って、100メートルで7センチずつ落ちてるんです。ものすごい精密な測量と設計が必要なんです。用水路って、掘れば流れるってわけじゃなくて、ある一定の水を、あるスピードで流すためには、粗度係数っていうのがあって、マンシングの法則っていうので計算してっていう、ものすごい綿密な計算をして、区間ごとに土の質とか違うので、どろが多いとか岩が多いとか全部、先生計算してやっていますよね。だから小林先生が、ダ・ヴィンチ的な天才っていうのはそのとおりで、それ、独学でやってるんですよ。

日本で農業用水路の最後の建設って、知多半島っていう、名古屋にある知多用水路というのが、最後っていわれてるんですね。昭和38年だったかな。それ以降、多分、本格的な水路って、日本でも誰も造ったことがないんですよ。アフガンでそれを医者がやってしまうって、すごいですよね。中村先生はそういう意味では、自分はもう医者って名刺に入れてませんっておっしゃってて。技師って入りたいっておっしゃってて。だから、医者が余興で造ったと思われたくないとおっしゃってました。

堀 : だから、土木学会の賞をいただいたときに、すごく喜んでいらしゃった。素人ではないということも認めてもらったっていうようなところですよ。

谷津 : 土木学会の授賞式って、すごいです。盛大にやって。たまたま先生のお手伝いで行ってたんですね。そしたら、その賞が、次々に発表されるんですけど、ほとんどが…。

當眞 : (座談会の残り時間あと5分を知らせるアナウンス)

谷津 : 要は、そのときに発表が、鹿島建設のシールド工法による何とかかんととか、ちんぷんかんぷんのとてつもない最先端の技術が発表されるんですけど、その中、突然ペシャワール会の用水路建設技術って、どーんって出たとき、どよめいたんです。

中村先生がおっしゃったのは、技術っていうのは、人を幸せにする技術と、幸せにしない技術があるっていうのはちらっとおっしゃって。中村先生は明確に、原発は本当に人を幸せにしていますかって、そういう意識ではいらしたと思うんです。

小林 : あれは、特別賞ではなくて、ほんまのトップの賞やったんやてね。技術のトップの賞やったんやね。



谷津 : ほんまの賞です。特別賞じゃないですね。先生、喜んでましたよね。
すみません、僕と小林さん、年寄り軍団がしゃべりまくっちゃって。ごめんなさい、なんか。

堀 : あとちょっとなので、これは聞きたいとかいうようなこと。梶井さん。

梶井 : いや、さっきの土木賞のことじゃないですけど、今は技術者チームって言って、福岡とか東京で働いてた人からアドバイスを受けながら、灌漑事業が進んでいってるんですけど、その人たちも、中村先生の技術はすごいですってずっと言われてて。

ある部分では勝てるけど、やっぱり、全体を見たら足許にも及ばないってことを言われてたんで、今はその話を聞いてて、それが頭によぎりました。

小林 : 梶井さんは、今、パシュトゥ語勉強してね。将来、現地に行こうと考えておられるよね。

梶井 : そうですね。

小林 : ペシャワール会としては、重要な人物で。

谷津 : 重要な。

梶井 : 他にもいっぱいいるんで。

堀 : もともと何かやっておられたということはあるんですか。

梶井 : もともとは、全然関係ないっていうか、大学終わって会社に入って、そこが飲食事業してるとこだったんで、飲食の仕事ぐらいしてっていう。

堀 : 大学のご専門と何かつながっていたりはするんですか。

梶井 : いや、全くないですね。だから、(大学生高校生の)みなさん、こんなときから、こんなこと考えるんだとか。

小林 : でも、自分の専門を離れて、会社に勤めとったのに、ペシャワール会入るだなんて相当、勇気がいったと思うんですけど。ご家族も反対されたりなんか、そんなんは。

梶井 : いや、家族には事後報告だったんで。どうしようもなくって。

谷津 : 梶井さんたちが、すごい支えてますよね、今は。現地の、会長がちょっと言ってた、お金を送



るだとか、現地の工事を進めるために、目立たないけど、梶井さんたちがすごい働いて、やっているなって。

堀　　：私、ちょっと聞きたいんですけど。中村先生、デザイナーだけじゃなくて、プロデューサー、コーディネーター、なんの役割でもされている。それから、医療、灌漑、土木、農業、哲学とか、文化人類学とか宗教とか、結局、何でもフィールドとして。

小林　：体力もあるしね。

堀　　：体力も、ですよ。大学で研究者とかもたくさんいるわけですけど、中村先生のどういうところを、特に掘り下げて、もっと誰か研究してくれたらなとか、そういうのってありますか。

谷津　：短く。

中村先生って、さっき言ったように「働くことの意味」っていう視点で、先生の映像を見直したり、文章を読むと、必ずそれに答えてくださる文章があったり、映像があるんですね。ということは、例えば医学とか、働くことの意味とか、いろんなカテゴリーで中村先生を研究して、実像が現れてくるとしか思えてなくて。時間はかかるんだろうなと思うんですが、それぞれの専門家が、用水路だったら技師が先生の技術をどう評価するか、小林先生みたいな、実際に医療をやってる方が、中村先生の医師としての姿とか、そういうことをきっと、いろんな専門の方からの研究対象としても、十分必要な、そういう素材、対象なんだと思うんですね。

堀　　：やれることは、いくらでもありますね。

谷津　：そうですね。

小林　：中村先生のことを書きたいっていう人が、いっぱい出てきてるらしくてね。ペシャワール会として、整理するのも大変。私もその1人ですが。


眞　　：（グループでの座談の終了を知らせるアナウンス）


（了）



座談会参加者のインタビューシートより

※座談会参加者に回答してもらった、事前インタビューシートから、回答の一部を抜粋して掲載しています。

	初井 孝文（もみい たかふみ） ペシャワール会 PMS 支援室
中村哲医師のここが面白い、ここを知ってほしい、ここを研究してほしい	
現地の人に寄り添って活動をされていたこと	

	小林 晃（こばやし あきら） 医師・元現地ワーカー
中村哲先生とあなたとの関わりは？出会った/興味を持ったのはいつですか？	
<p>「パキスタンのペシャワールという所でハンセン病の診療をしている日本人医師がいる」という話を聞き、1988 年春、大学の卒業旅行でペシャワールを訪れました。アポなしで先生がハンセン病診療をしていたペシャワール・ミッション病院を訪問し、そこで中村先生に初めてお会いしました。1997 年から 4 年間、ペシャワール会の活動に医師として参加しました。</p>	
中村哲先生の存在は、今のご自身のお仕事、人生にどのような影響を与えましたか？	
<p>志半ばでペシャワールから帰国しましたが、帰国後の人生を振り返りますと迷いもありましたが、普通の人より自由に生き、それなりに人生のやり直しができたと思います。先生亡き後、先生の著書すべてを繰り返し読みました。先生の「一隅を照らす」という言葉に出会い、おかれた時と所で「自分にとって良いことではなく、目の前にいる患者さんにとって良いことは何なのか」という目を持ち最善を尽くす、という医師として当たり前のことを実践すればよいのだということに気づき、自分を顧みることができました。</p>	
中村哲先生の言葉で、印象に残っているものは？	
<p>「一隅を照らす」という言葉があります。一隅を照らすというのは、一つの片隅を照らすということですが、それで良いわけでありまして、世界がどうだとか、国際貢献がどうだとかという問題に煩わされてはいけません。それよりも自分の身の回り、出会った人、出会った出来事の中で人としての最善を尽くすことではないかというふうに思っております。（一部省略して記載）</p>	
<p>『医師よ、信念は要らないまず命を救え!』（2003.10, 羊土社; p.49-50）</p>	
<p>様々な人や出来事との出会い、そしてそれに自分がどう応えるかで、行く末が定められてゆきます。私たち個人のどんな小さな出来事も、時と場所を超えて縦横無尽、有機的に結ばれています。そして、そこに人の意思を超えた神聖なものを感じざるを得ません。この広大な縁の世界で誰であっても、無意味な生命や人生は、決してありません。私たちにわからないだけです。この事実が知ってほしいことの一つです。私たちが己の分限をしり、誠実である限り、天の恵みと人のまごころは信頼に足るということです。</p>	
<p>『天、共に在り』（2013.10, NHK 出版; p.4-5） *他にもたくさん挙げていただきました</p>	
中村哲医師のここが面白い、ここを知ってほしい、ここを研究してほしい	
<p>中村先生は、幼少時、論語の一部を素読で暗誦していました。その記憶は生涯つきまとい、自分を内側から律する規範となっていると語っています。中村先生と論語について（論語の専門家から見た中村先生など）研究してほしいと思います。その他、「中村先生と平和思想」、「中村先生の考える教育とは」、などを研究していただきたいとも思います。</p>	
どんな方に中村哲先生のことを知ってほしいと思いますか。	
<p>先生のような「国際貢献」に限らず、自分が良いと思うことが「普通のルールから外れる」ような生き方を考えている多くの人に知っていただき、自分が良いと思うことへの第一歩を踏み出していただきたいと思います。</p>	
<p>若い人に限らず、全ての人に先生のことを知っていただき、先生の「生き様・哲学」を知ることで、己の人生の「励み」「道しるべ」となり、私のように改めて、自分自身を見つめなおす機会になればと思います。</p>	



谷津賢二（やつけんじ） 日本電波ニュース社 カメラマン

専門・仕事

私はテレビ番組制作会社、日本電波ニュース社でドキュメンタリー番組や記録映画の制作に携わっています。撮影、取材そして番組プロデュース業務も行っていますが、本来の職能はカメラマンです。海外取材が圧倒的に多く、これまでアジアや中東、アフリカなどの辺境でたくさんの撮影と取材を行なってきました。

弊社ベトナム・ハノイ支局に1995年から1998年まで3年間駐在しました。その間ベトナムだけでなく近隣のカンボジア、ラオス、タイでさまざまなドキュメンタリー番組の取材やニュース取材をしました。以来、30年近くインドシナ各国と関わり続けています。特にベトナム戦争の傷跡はインドシナ各国に残り、その傷跡を取材し一度戦渦に苛まれると、どれほどの悲劇に襲われるのか、そのことを伝えたいと努力していました。ちなみに弊社ハノイ支局は1964年から現在まで58年間維持されています。その間、ベトナム戦争とこれまでのベトナム現代史を一貫して記録してきました。

中村哲先生とあなたとの関わりは？出会った/興味を持ったのはいつですか？

1997年の秋に中村先生のご著書「ダラエ・ヌールへの道」を読みその内容に衝撃を受けました。そして、ドキュメンタリーカメラマンとして中村先生を取材したいと思い準備を始め1998年4月に最初の取材が実現しました。ドキュメンタリーカメラマンとして1998年から2019年までの21年間、断続的に中村先生の現地活動取材。20本以上のテレビドキュメンタリーと記録映画を制作しました。

中村哲先生の存在は、今のご自身のお仕事、人生にどのような影響を与えましたか？

中村先生は私が人生で最も影響を受けた人物です。中村先生を取材するため、私はアフガニスタンへ25回渡航、現地での総滞在日数は450日を越えました。日本での取材と取材以外でお目にかかった日数を加えれば優に500日以上時間を中村先生の側で過ごすことができました。その間、命と向き合いながら活動を続ける中村先生の姿から、交わしたさまざまな対話から多くを学びました。そうした中で私と中村先生の間には「取材対象者と取材者」という関係性は変容してしまい、人生の師だと思いその背を追い続けてきました。

中村哲先生の言葉で、印象に残っているものは？

この10年ほど、中村先生は著書や会報、そして講演会で「人と自然の和解」という言葉を繰り返し述べていました。私はその言葉を目にし、耳にするたびに少し違和感を覚えていました。「人と自然が共存する」のではなく「人が自然を守る」でもなく「人と自然が和解する」。和解という言葉が私がかたく理解できていなかったのです。2019年4月のアフガニスタンでの取材時にようやく中村先生に次のような質問をしました。「なぜ和解という言葉を使ったのでしょうか？」と。そして先生の答えはこうでした。「私は自然にも人格があると考えています。だから人格を持つ人間と自然が和解する、と表現しているのです。」その答えは私が考えてもみなかったもの、「自然に人格がある」という発想にショックを受けたのです。その後も続いた先生との対話から、その真意をこう理解しました。「自然を物言わぬものと理解してしまうと、人間が欲望のままに自然から恵みを奪ってしまう。しかし、自然に人格があると思えば、対話が成立し、いたわる気持ちも持てる。人は自然と対話しながら、分をわきまえた恵みを受け取り事でしょうか、私たちの未来は成立しないのではないか。」この言説は、私は中村先生の思索の頂点の一つだろうと思っています。そして、この思索を用水路建設という厳しい実践の中で得たものだろうと思うのです。アフガンでの用水路建設の要となった「斜め堰」が持つ思想性を中村先生が読み解いた物とも言えるでしょう。「斜め堰」は自然から必要な水量だけ、つまり必要な恵みだけを得て、残りの水は本流に返す構造になっています。必要な恵みだけを受け取るという、私たちの祖先が持っていた技術が体現する自然観を中村先生は技術と思索を丸ごと理解し、自身の深い思索へと沈殿させていったのでしょうか。私は中村先生が到達した「人と自然の和解」という思索にこそ、私たちが目指すべき世界の基礎になると信じています。

中村哲医師のここが面白い、ここを知ってほしい、ここを研究してほしい

中村先生の凄さは「荒野に立つ哲学者」だったということです。私たちが知る「知の巨人」は基本的にアカデミズム出身の方が多く、私たちが思っています。その点、中村先生は知識人ではあるがアカデミズムとは離れ、思索と実践に励んだ「荒野の哲学者」だったと思います。自らの実践とともに思索を深め得た哲学はアカデミズム生まれの哲学では無い、野太さがあるこんなことを思いながら中村先生のことを知って欲しいと思っています。



中村先生について伝えるとき、大事にしたい・気を付けている事。困ったな・悩ましいなと思っていること

中村先生のことを語れば語るほど、表現すればするほど、その本質と離れていくのではないか…という懸念を私はいつも感じています。言葉や映像での表現では捉えることができぬほどの巨人、常に隔靴搔痒の感に悩んでいます。



藤井登睦（ふじいとうま） 福岡高校2年 ペシャワール班

中村哲先生とあなたとの関わりは？ 出会った/興味を持ったのはいつですか？

中村先生の母校である福岡高校に在籍。

親の話で二年ほど前。

中村哲先生の存在は、今のご自身のお仕事、人生にどのような影響を与えましたか？

一部を見て全体を判断することを意識してしないようになった

中村哲先生の言葉で、印象に残っているものは？

百の診療所より1本の用水路

中村哲医師のここが面白い、ここを知ってほしい、ここを研究してほしい

中村哲先生は現地の人の価値観まで考えていた(モスクとか)

中村先生について伝えるとき、大事にしたい・気を付けている事。困ったな・悩ましいなと思っていること

中村先生の活動を調べる時、深く調べることを気を付けている

ほかの参加者の方に質問！

あなたが中村先生の活動を調べて、気づいたことは？

(高校生・大学生へ) 中村哲先生について、どんなことを知りたい、学びたいですか？*

彼は日本にいたときどのような考えをもっていたか



轟木亮太（とどろきりょうた） 大分大学医学部2年 九州大学薬学部卒業生
中村哲先生の想いを繋ぐ会/哲縁会

専門・仕事 医学。感染症/途上国での医療/災害医療に興味があります。

中村哲先生とあなたとの関わりは？ 出会った/興味を持ったのはいつですか？

ワークキャンプをする団体の先輩（浦田さん）がペシャワール会に勤めていたことや九大の医学キャンパスで中村先生の講演を拝聴した時（大学1，2年生）。中村哲先生の想いを繋ぐ会として、記念講座やメモリアルイベント、学生団体とどのように志を繋ぐかについて考えている。

中村哲先生の存在は、今のご自身のお仕事、人生にどのような影響を与えましたか？

ネパールで活動する際に、途上国で活動するうえでの心がけるべきことを示唆してくれた。

中村哲先生の言葉で、印象に残っているものは？

誰も行かぬなら、我々が行く

中村哲医師のここが面白い、ここを知ってほしい、ここを研究してほしい

現地の方法や人々の力をこれほど巻き込んで活動している人は少ないと思うため。

主役は現地という意識。


中村先生について伝えるとき、大事にしたい・気を付けている事。困ったな・悩ましいなと思っていること


自分が何か中村哲先生について伝えずに、著書などを読んでもらうようにする。

(高校生・大学生へ) 中村哲先生について、どんなことを知りたい、学びたいですか？*


中村哲先生があれば活動が支持された理由とはなんであるか？




	吉松拓也（よしまつたくや）九州大学芸術工学部2年・哲縁会
専門・仕事	九州大学芸術工学部インダストリアルデザインコースに所属しております。プロダクトや空間、サービスを対象としたデザインと人間工学の2分野を大学で学んでいます。研究室配属はまだですが、どちらかという人間工学分野で人のパフォーマンスの研究をしたいと考えています。
中村哲先生とあなたとの関わりは？出会った/興味を持ったのはいつですか？	
高校1、2年生の頃、母の影響で中村哲先生のドキュメンタリー映像を見たことが興味を持ったきっかけです。直接お会いすることは叶わなかったが、本やテレビといった媒体を通じて、哲先生の考え方に触れています。	
中村哲先生の存在は、今のご自身のお仕事、人生にどのような影響を与えましたか？	
哲先生の考え方の中で、できるかできないかではなくまずやってみようというものや、他人の靴を履くように現地に馴染むという考え方が自分のアイデンティティの一部になっている気がします。	
中村哲先生の言葉で、印象に残っているものは？	
「人は見ようとするものしか見えない」	
中村哲先生のここが面白い、ここを知ってほしい、ここを研究してほしい	
中村哲先生は、歴史上の偉人ではなく目の前の困難を何度も試行錯誤しながら乗り越えられた人だということを知ってほしいです。	
どんな方に中村哲先生のことを知ってほしいと思いますか。	
デザインを勉強している私にとっては中村哲先生がデザイナーであると感じることが多々あります。同じ芸術工学部の学生に哲先生のことを知ってもらいたいと思います。	
中村先生について伝えるとき、大事にしたい・気を付けている事。困ったな・悩ましいなと思っていること	
偉人として扱うのではなく、ただ、こんな人がいたんだという事実や考え方を知ってもらいたいと思っています。	
(高校生・大学生へ) 中村哲先生について、どんなことを知りたい、学びたいですか？*	
哲先生が困難に直面した時、どのように乗り越えようとしたのか現地での行動を知りたいです。	
その他	直接哲先生とお会いしたことのない私たちが、本を読んで、その想いを拡大解釈してしまわないか心配です。哲先生の考えをさらに応用や発展、昇華させることと、拡大解釈することの判断が難しいように感じます。

	堀 優子（ほり ゆうこ）九州大学附属図書館 e リソース課長
専門・仕事	九大図書館で、現在は電子リソースに関わる仕事をしています。ジャーナルや電子ブックの整備、機関リポジトリによる九大の研究成果等の発信、貴重資料等の電子化公開などです。その前は15年間くらい、伊都キャンパスの2つの新図書館の立ち上げと移転に中心的に関わってきました。新図書館の基本計画、設備（書架や閲覧机など）・サイン（案内板など）・資料配置・資料移転準備などの計画立案から実施まで多岐にわたるおもしろい仕事でした。
中村哲先生とあなたとの関わりは？	
九大図書館として、「中村哲著述アーカイブ」の企画運営に関わらせてもらいました。また、数年前に、ペシャワール会の写真パネル展を箱崎中央図書館で企画実施させてもらいました。個人的には、直接お話ししたことはありませんが、講演会や新聞・テレビ、著書等で聴いたり読んだりしていました。	
中村哲先生の言葉で、印象に残っているものは？	
私のメッセージは平凡である。目をこらして、何が虚構で、何が事実かを見つめ、世の流れに惑わされぬことである。（「新ガリバー旅行記」最終章より）	
中村哲先生のここが面白い、ここを知ってほしい、ここを研究してほしい	
(活動にしても言葉にしても) 出力の量とその力が圧倒的過ぎて、とにかくできる限りアーカイブして発信していくのみです。	
中村先生について伝えるとき、大事にしたい・気を付けている事。困ったな・悩ましいなと思っていること	
広告塔にしないこと。地に足を着けて、迷っても惑わされずに息長く取り組んでいくこと。	



オブザーバ 	宮崎信義 (みやざき のぶよし) 医師 (重症心身障害医療)
中村哲先生とあなたとの関わりは? 中村先生と出会った/興味を持ったのはいつですか?	
1966年4月(九大医学部入学時)九大医学部に同期入学、親友として付き合ったこと、教会やペシャワール会における支援。医学生として、家族的な交わり、同じキリスト教会員として、学生運動を共にして等。友として、学生~青年医師(ペシャワールに中村哲医師が赴任するまで)の時代に行動を共にして何でも語り合った。	
中村哲先生の言葉で、印象に残っているものは?	
「見栄や銜いではなく」、「当たり前のこととして」	
中村哲医師のここが面白い、ここを知ってほしい、ここを研究してほしい	
ハンセン氏病診療から始まる海外支援が、医療にとどまらず、病気が軽快した後の生きるすべを心配する(靴工場の労賃など)ことを「当たり前のこととして」、一步一步進んだ結果が偉業となった。飽きが来ないことは、学生時代の食べ物(かつ丼など)がたいてい決まっていたことにも表れていたようです。	
どんな方に中村哲先生のことを知ってほしいと思いますか。	
一般庶民や困窮者以上に世の指導者層が中村哲医師の活動の真意を少しでも理解してほしい。	
中村先生について伝えるとき、大事にしたい・気を付けている事。困ったな・悩ましいなと思っていること	
彼自身も嫌っていたヒロイズム(英雄崇拜)として取り扱われず、現地の人々の幸いに繋がる報道がなされることを願っています。	
中村哲医師も一時の熱情ではなく、派手さはなくともアフガニスタンやアフリカなど、困窮している方々への理解と共感が深められることが中村哲医師の生涯の証しとなると思います。私はペシャワール会の方々の活動の継承や母校の方々の支援に敬意を覚えています。自分としては彼が他界したことの悲しみと寂しさをいつも覚えます。	
(先生方へ)中村先生について伝える際「道徳的」なメッセージ性を、どのくらい出そうと(抑えようと)していますか?*	
彼の活動の根底には、現地で布教は出来ませんでした。が、キリストの証人として立場を明確にしていたと思います。マザー・テレサとの類似点も覚えます。彼自身が英雄視されることを嫌っていたことは間違いのないことです。学生時代の日常は、どちらかと言えば目立たない存在でしたが、事が起これば「淡々と実行したに過ぎない」と思っていることでしょう。	
その他	中村哲医師が活動の初めから現地の人々の自立(カイバル医学校での教育など)と活動の維持(水路の保全など)に努めたことは、まさに彼ならではの個性とも言うべきことでしょう。彼自身はキリスト教徒であることを隠しませんでした。が、イスラム社会で昔、宣教団が改宗させようとして失敗した歴史は当然だと言っていました。

オブザーバ 	内藤 敏也 (ないとう としや) 九州大学役員(理事・事務局長)
中村哲先生とあなたとの関わりは?	
九州大学において中村先生に関する活動に関わっています	
中村哲先生の存在は、今のご自身のお仕事、人生にどのような影響を与えましたか?	
中村先生の足跡を九州大学の学生を含め、後世に残していくべきと考えるようになった	
中村哲先生の言葉で、印象に残っているものは?	
人は愛するに足り、真心は信ずるに足る	
中村哲医師のここが面白い、ここを知ってほしい、ここを研究してほしい	
自分の専門を遥かに越えても必要なことを学んでいく姿勢	
中村先生について伝えるとき、大事にしたい・気を付けている事。困ったな・悩ましいなと思っていること	
実際にはお目にかかったことがないので、想像の中で美化しすぎないように考えています	
(先生方へ)中村先生について伝える際「道徳的」なメッセージ性を、どのくらい出そうと(抑えようと)していますか?*	
事実に基づいて中村先生を理解することが必要です。そのためには、実際に中村先生と一緒に仕事をした方からのお話が重要だと思います。	
その他	中村先生に関わる方、中村先生に思いのある方が繋っていくことが重要だと思います。

